

[学術論文]

ローマ字表記の問題点

Problems in the System of “ROOMAJI”(Latin alphabet)
in Contemporary Japanese

成 田 徹 男

NARITA, Tetsuo

Studies in Humanities and Cultures

No. 16

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 16号
2011年12月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
DECEMBER 2011

[学術論文]

ローマ字表記の問題点

Problems in the System of “ROOMAJI”(Latin alphabet) in Contemporary Japanese

成田 徹 男
NARITA, Tetsuo

0. はじめに
 1. 日本語のローマ字表記規則
 - 1-1. 『ローマ字のつづり方』【1954(昭和29)年内閣告示第1号】
 - 1-2. ホームページ英語版のローマ字表記
 - 1-3. パスポートのなまえ表記
 - 1-4. 国際規格「ISO3602」
 2. 「かな漢字変換」の「ローマ字入力」
 - 2-1. 「かな置き換え方式」
 - 2-2. 「ローマ字入力」のみの特徴
 - 2-3. カタカナ表記との関係
 3. ローマ字をつづる方式の整理
 4. ローマ字表記の問題点
- おわりに

キーワード：文字、表記、ローマ字、カタカナ、ローマ字入力、外来語

要旨 本稿では、「ローマ字で、語をどう表記するか」についてふまえておかなければならないのは、どのような点かをかんがえるために、現行のローマ字のつづりかたについて、その変異のありかたを整理してみた。

ローマ字表記の方式としてひろくおこなわれているのは、

<1> 「訓令式 長音符号方式」

<2> ヘボン式

<2-1> 「ヘボン式 長音符号方式」

<2-2> ヘボン式 長音符号なし方式

<2-2-1> 「ヘボン式 英語方式」

<2-2-2> 「ヘボン式 OH方式」

<3> 「かな置き換え方式」(長音符号なし「訓令式」「ヘボン式 英語方式」をふくむ)と整理できる。

ローマ字表記の問題点としては、つぎの二点を指摘した。

1. 全体として日本語の表記をどうしていくか、という方向がみえないため、ローマ字表記の位置づけが不明確である。
2. 日本語のローマ字表記は、だれのためのものなのか、が不明確である。

0. はじめに

文章のなかに「ペDESTリアン・デッキ」という語があったとして、「横文字にはよわいから、わからない」などと言うことがある。「縦がきでカタカナ表記」であったとしても、「横文字」と言う。『広辞苑 第六版』によると、「よこもじ」の意味は、「①横書きに記す文字。西洋文字・梵字・アラビア文字など。特に西洋の文字の称。②西洋語。また、その文章。」である。この場合は、②の「西洋語」の意味ということになる。このように日本語話者には、「外来語」、とくに意味のわからない語について、「西洋の外国語」ととらえてしまう感覚がある。

「ペDESTリアン・デッキ」とは、“pedestrian deck”、つまりは「歩道橋」のことで、出川（1995）において槍玉にあげられている語のひとつである。ふつうより大規模な歩道橋をさすようなので、「ほどうきょう」という語と対立する、という意味の面からも、そしてカタカナ表記という文字の面からも、日本語の語彙ということになるはずであり、「外来語」ではあっても、「外国語」そのものではない。にもかかわらず、「外国語」ととらえがちなのである。

さて、「ペDESTリアン・デッキ」をローマ字でかくとしたら、どうするか。1954(昭和29)年の「内閣告示第1号」つまり『ローマ字のつづり方』の表に示されたつづりかたにしたがうとしても、【pedesutoriandekki】【pedesutorian dekki】【pedesutorian-dekki】【pedesutorian・dekki】のいずれなのか（以下、ローマ字のつづり、またはローマ字入力 of 打鍵順を【 】内にしめすこととする）。それとも「英語だから」原つづりどおりに“pedestrian deck”なのか。つまり、「外国語」ととらえるべきなのか。このように、ローマ字表記には、たとえば「外来語」をどうかくか、というおおきな問題がふくまれている。

もっとも、おおくの日本語話者は、日常的にローマ字で日本語の文章をかくようなことはない。すなわち、ローマ字の「書き手」になることはまれであった。ただ、パソコンを日常的に使用する人がふえ、とくに英語の単語や表現も日本語の文章にまじえてつかうような人にとっては、「ローマ字入力」は不可欠のものとなっている。この「ローマ字入力」は、基本的には『ローマ字のつづり方』にいちおうしたがっているものであるが、たとえば外来語をカタカナ表記したときの「ティ」を【t-h-i】あるいは【t-e-l-i】と入力しなければ「かな変換」できないように、『ローマ字のつづり方』にしめされている以外の「つづり方」をふくんでいる。一方、日常目にするローマ字表記としては、駅名表示が代表的なものである。「読み手」としても、その対象は、固有名詞を典型とする、かなりかぎられた範囲のものになる。本稿では、現在のローマ字表記の規則や習慣をおおよそ整理し、ローマ字表記の問題点をかんがえてみる。

1. 日本語のローマ字表記規則

1-1. 『ローマ字のつづり方』【1954(昭和29)年内閣告示第1号】

現代日本語のローマ字表記についてさだめているのは、この内閣告示である。敗戦後、日本語の表記について、やつぎばやに『当用漢字表』『現代かなづかい』『外来語の表記』などが国語審議会答申によってさだめられたが、ローマ字については、ややおくれてきめられた。

「さだめている」とはいても、この「ローマ字のつづり方」自体が、第1表の「訓令式」を標準としようとしながら、その一方で、第2表の「ヘボン式」を許容するものである。「前がき」の2に「国際的關係その他従來の慣例をにわかにかへたい事情にある場合に限り、第2表に掲げたつづり方によつてもさしつかへない。」とあるが、「にわかにかへたい」どころか、現実の生活で目にする範囲では「ヘボン式」によるつづり方のほうが優勢である。

これは1947年7月運輸広報の「鉄道揭示基準規程」により、鉄道の駅名表示が「改修ヘボン式」によることになった（菱山 [2005]）影響がおおきいものとおもわれる。ローマ字表記については、それ以前の「ヘボン式」による表記習慣を追認するかたちできめられたものと推察される。影響がおおきい、というのは、印刷物のローマ字表記は、小学校の国語教科書以外では、一部の会社名、歌手など芸能人の芸名・グループ名、プロ野球やサッカー選手などのユニホームに記された選手名がローマ字表記されることがある程度であるが、プラットホームに設置された駅名標識にはたいてい、漢字（ひらがなまじり）とともに、ひらがな表記とローマ字表記がつけられているからである。どこまで意識しているかは別にして、ひごろ目にする可能性がたかいことはたしかである。よむ機会がおおいのは、「ヘボン式の固有名詞表記」なのである。この、「ローマ字長音符号」もつかう表記方式を「ヘボン式 長音符号方式」とよぼう。

1-2. ホームページ英語版のローマ字表記

鉄道の駅名表示では、「ローマ字長音符号」がつかわれている。高橋 [1997]、佐渡島ほか [2009] によると、バス停や、地下鉄構内の案内表示でも、この「ヘボン式 長音符号方式」がつかわれている場合があるようだが、「ローマ字長音符号」はだんだんに使用されなくなってきているのではないかとおもわれる。さまざまな印刷物や標識の作成にも、コンピュータが使用されるので、入力の手間な「ローマ字長音符号」はさけられるのではないかと。

もともと英語の文章のなかでは、「Tokyo」「Osaka」を代表として、日本語の地名・人名表記に「ローマ字長音符号」はつかないのがふつうである。そのため、JRのホームページで時刻表の英語版をみると駅名表示に「ローマ字長音符号」をつかっていない。東京・大阪・名古屋・福岡

・札幌・京都・仙台の地下鉄の英語版路線図についても同様である。地下鉄については、どうやら駅名標識でも「ローマ字長音符号」をつかわないところが大部分のようである。

大部分の人は「英語ではこれがふつうだ」とおもっているのであろうし、「英語は地球語」だから、世界中すべてでこの方式が標準的なのだ、とおもいこんでいる人もおおいにちがいない。このような「ヘボン式」で「ローマ字長音符号」をつかわないものを「ヘボン式 英語方式」とよんでおく。

この方式と関係があるのが、ローマ字表記と併用される（おりこまれる）英語表記である。高橋 [1997]、佐渡島ほか [2009] に実例があがっているように、ローマ字表記のなかで、たとえば「～センター」を「～Center」と表記したり、「～ビル」を「～Bldg.」と表記したりするのは、英語の文脈、英語の読み手を意識するからこそ、であろう。このほうが便利だ、とおもわれているのであろう。「このほうが便利」なのは英語がわかる人だけであり、「～Bldg.」が何を意味するかわからない人もたくさんいるであろうこと、あるいは英語母語話者であっても、日本語で「～ビル」ときいて、それが「～Bldg.」であることがわからない場合もあるであろうことは、考慮にいれられていないのである。おなじ「横文字」なので、意味がわかるように英語で表記することと、おとがわかるように日本語をローマ字で表記することとが混同されているのである。

1-3. パスポートのなまえ表記

ローマ字でかく、ということになると、パスポートをはじめ各種の書類で、自分のなまえをかく機会がまずおもうかぶ。外国へ手紙をだすときに自分の住所をローマ字表記することもある。ほぼ固有名詞で構成される、なまえ・住所ではなく、日本語の文章をローマ字でかく必要性は、日常ではほとんどない、と言ってよいだろう。このような場合も一般的には「ヘボン式の固有名詞表記」である。

パスポートのローマ字表記については、「旅券法施行規則」で「ヘボン式」とさだめられている。ただし、それ以外の表記ももうしでてつかうことができる。また、外務省はオ段の長音表記で【o-h】とつづることを許容している。『ローマ字のつづり方』では、長音は、母音字を重ねるか【o-o】、母音字の上に「ローマ字長音符号」をつけて表記する【ô】【ō】ことになっているが、パスポートでは、「ローマ字長音符号」をつかわなくてもよい（現在ではつかわないほうがふつうであろう）ことにしているからである。このため、「小野」と「大野」とが、ともに【o-n-o】と表記されるという不都合がある。玉村 [1997] の指摘にもあるが、かつて王貞治のユニホームには「OH」【o-h】とかかれていた。日本の野球はアメリカの方式にならっていることがおおいいため、母音字をかさねたり母音字の上に「ローマ字長音符号」をつけたりしないで表記する発想になる。英語という文脈のなかで日本人名をローマ字表記しようとするそれが自然である。「ロ

「ローマ字長音符号」をつかわず【o】としたのでは、アラビア数字の「0」（ゼロ／零）と区別が付きにくい。そんなところから、オ段の長音を【o-h】とつづる習慣がひろまっていったのであろう。パスポートの表記では、それを追認しているわけである。このようなものを、オ段長音表記の特徴から「ヘボン式 OH方式」とよぶことにする。

小学館辞典編集部編 [2007]『句読点、記号・符号活用辞典。』によると、ここで「ローマ字長音符号」とよんでいるものは、ひとつは山型の「きょくせつアクセント(曲折アクセント)」または「アクサンシルコンフレックス(仏 accent circonflexe)／サーカムフレックスアクセント(英 circumflex accent)／ハット(英 hat sign)」【^】、もうひとつは横棒状の、「マクロン(英 macron)」【¯】である。単に「シルコンフレックス」ともよばれる前者は、小学校でのローマ字指導でつかわれ、さきにふれた「鉄道掲示基準規程」では後者の「マクロン」をつかうことになっている。小林 [2011] によると、ユニコードでは、シルコンフレックス／マクロンがついた「すでに用意されている (プリコンポジション)」ものもあり、母音字とシルコンフレックス／マクロンを合成する方法 (ダイナミックコンポジション) もあるようだが、いずれにしてもキーボードから直接入力できるわけではない。あとにのべる長音符号の例もあるので、技術的には、シルコンフレックス／マクロンをキーにわりあてることは可能だともうが、それだけの需要・要求がなかったのであろう。

なお、現在のパスポートではなまえを「姓 “Surname”」、「名 “Given name”」とし、この順序にしめしている。自己紹介するとき、英語でも何語でも日本のなまえなのだから「姓一名」の順序でよい。その意識がひろまってほしいものである。

1-4. 国際規格「ISO3602」

国際規格の「ISO3602」は、日本語のローマ字表記に関するもので、基本的に『ローマ字のつづり方』の第1表、つまり「訓令式」である。これを、「訓令式 長音符号方式」とよんでおく。ひらがな文を、ローマ字でつづる方法をさだめたものであるが、日常への影響はあまりない。以下でのべるように、パソコンへの「ローマ字入力」では「訓令式」も「ヘボン式」も可能であって、「ISO3602」による制約はないからである。

2. 「かな漢字変換」の「ローマ字入力」

規則ではないが、習慣的にほぼ共通したローマ字のつづりかたが定着しているのが、パソコンへのキーボードによる日本語入力でつかわれる「ローマ字入力」である。「かな漢字変換」システムの一部であって、直接的にはローマ字による出力を目的としたものではないため、ローマ字

で入力すると一時的にローマ字で画面上に表示されても、かたはしから拍単位でひらがなに置き換えられていく。変換キーをおすことで、そのひらがな群を、漢字（ひらがなまじり）あるいはカタカナ（ひらがなまじり）に変換するわけである。

携帯メールではテンキーにわりあてられた文字を指一本で必要な回数連打する「かな入力」がふつうであるが、キーボードによる入力では「かな入力」より「ローマ字入力」がおおいであろう。ソフト（フロントエンドプロセッサ）によって細部にちがいがあっても、一般的に「訓令式」と「ヘボン式」のいずれでも入力可能で、両者がいりまじっていてもかまわない。

2-1. 「かな置き換え方式」

ローマ字入力は、日本語文のローマ字表記ではない。石綿 [1997] に「ローマ字入力というのは、伝統的、正統的ローマ字を使うというのではなくて、かなを入力するために、ローマ字キーを借りて使うだけだ、と考えると、説明のつくことがいくつかある。」として、助詞の「は」【h-a】「ぎんこう（銀行）」【g-i-n-k-o-u】の例をあげている。つまり、ローマ字入力とは、日本語の文章を、最初からローマ字で表記しようというのではなく、ひらがなの「現代かなづかい」による表記を、一字一字ローマ字によって置き換える作業なのである。「訓令式」、「ヘボン式」いずれでも入力可能となっているが、「ローマ字長音符号」はつかわない（つかえない）。『ローマ字のつづり方』にしたがっているというより、その表にしめされた拍のローマ字表記を、拍単位でつかっているだけなのである。このような表記方式を「かな置き換え方式」とよぶことにする。

筆者はながいあいださまざまな講義科目などで、受講者にたいして「無意識の体系である母語について意識化する」ことがたいせつだ、と伝えてきた。しかし、当の本人が「ローマ字入力」において『ローマ字のつづり方』とちがう入力をおこなっていることを明確に意識しはじめたのは石綿 [1997] をよんでからのことである。もともとローマ字で日本語の文章をつづることがほとんどないという事情があるうえに、あまりにも反射的に、『現代仮名遣い』のひらがな表記の、ローマ字への置き換え作業をおこなってきたため、そして「ローマ字入力」ではローマ字の文字列はひらがなに置き換えられるまえの一瞬しか目にすることがないために、『ローマ字のつづり方』とちがうとはおもいつつも、どこがどうちがうのか整理してみることはなかった。内省してみると、対象の語句のひらがな表記をおもいうかべてはローマ字に置き換えているようである。

日本語の文法について、ローマ字表記によって活用を説明するとき、拍を意識する目的もあって、「行こう」を【i-k-o-o】というように、才段長音を、母音字をかきねることによって表記しているけれども、学生がかいたものをみると【i-k-o-u】となっていることがおおい。全般的にローマ字でかくことになれていないことにくわえて、キーボードからローマ字入力するのになれている場合は、つい「かな置き換え方式」でかいてしまうということだろう。

2-2. 「ローマ字入力」のみの特徴

文字の置き換え作業とかがえれば、『ローマ字のつづり方』の拍対応一覧表にはみられないつづりがあるのは当然である。「まあ」「ねえ」とか「ヴァヴィヴヴェヴォ」「ディ」「テュ」とか、ひらがな・カタカナ表記であらわれてくるものをすべてローマ字で入力しなければならないからである。一般的には、「まあ」は【m-a-l-a】ないし【m-a-x-a】、「ねえ」は【n-e-l-e】ないし【n-e-x-e】、「ヴァヴィヴヴェヴォ」は【v-a, v-i, v-u, v-e, v-o】、「ディ」は【d-h-i】ないし【d-e-l-i】【d-e-x-i】、「テュ」は【t-h-u】と入力する（さすがに、「あ°」「ま°」のようなものはキーボードだけでは入力できないが）。さらに【p-y-e】で「ぴえ」、【b-u-l-y-u】で「ぶゆ」も表示できる。通常のつづりかた以外の使用可能なくみあわせ（ギャップ）も利用できるようになっている。

これらはワープロ、ワープロソフトの開発に際して、需要・要望があるものにはできるだけ対応しようとしてくふうされてきた結果である。どこかに標準とか規程があるわけではない。日本の表記習慣が基本的にそうであったように、つかわれているうちに、おおそ標準的な方式がひろまってきた。効率だけからいえば、かつてNECが開発したキーボードであったように、漢語で頻出する【a-n】【i-n】【u-n】【e-n】【o-n】を一打鍵で入力できるキーを別につくるなどの方法もある。しかし、実用面では、習慣の継続性あるいは惰性を考慮せざるをえない。要するに、売れなければどうしようもないのである。

2-3. カタカナ表記との関係

このような「ローマ字入力」のみの特徴は、上記の例にもあるように、外来語の入力、つまり、日本語文の一般的な表記ではカタカナ表記される語の入力についておおくみられる。ひらがなで「うゝい」「でい」などと表記することはほとんどないにもかかわらず、「ローマ字入力」では、いったんこれらのひらがな表記が表示されてから、カタカナに変換される。

カタカナのつづりかたは、『外来語の表記』によってさだめられている。前提は、まず外来語という語種の認定がさきにある、ということである。一方『現代仮名遣い』は、ひらがなのつづりかたしかきめていない。和語・漢語をカタカナでどうかかか、についての規程はどこにもないのである。成田 [1994] で指摘したことがあるように、カタカナの「カナづかい」は、実は二つの基準による。つまり、『外来語の表記』に準じて「キューリ」「チョーダサイ」などとかがか、ひらがなのきまりである『現代仮名遣い』を援用して「ヨゾラノムコウ」「キュウリ」のように表記することになる。前者では、「ローマ字入力」の段階で、「ー」（カタカナ長音符号）対応のキーをおして入力する。本来、カタカナの表記体系でつかわれるカタカナ長音符号（「ー」）を、

「ローマ字入力」にくみこんでいるわけである。つかわれるキーは、ハイフンなどの記号にわりあてられているが、日本語入力用ではその第一候補にカタカナ長音符号「ー」をいれることで技術的なそして実用的な解決をしている。後者では、ひらがな表記を一对一でカタカナに置き換えているわけで、その意味でこれも「かな置き換え方式」とよぶことができる。

3. ローマ字をつづる方式の整理

ここで、ローマ字のつづりかたについて、整理しておこう。文章をかくには、わかちがきの方法などをふくめて、いろいろな方式がありうるが、とりあえず、主として固有名詞をローマ字で表記する方式として現在ひろくおこなわれているのは、以下のものである。

< 1 > 「訓令式 長音符号方式」

< 2 > ヘボン式

< 2-1 > 「ヘボン式 長音符号方式」

< 2-2 > ヘボン式 長音符号なし方式

< 2-2-1 > 「ヘボン式 英語方式」

< 2-2-2 > 「ヘボン式 OH方式」

< 3 > 「かな置き換え方式」(長音符号なし「訓令式」「ヘボン式」両方に対応)

ここまであげたものとの関係をしめすと、ISOは< 1 > 「訓令式 長音符号方式」、『ローマ字のつづり方』とそれに基づく学校教育では< 1 > 「訓令式 長音符号方式」か< 2-1 > 「ヘボン式 長音符号方式」、JRや私鉄の駅名表示は< 2-1 > 「ヘボン式 長音符号方式」、地下鉄の駅名表示やJRなどのホームページの英語案内では< 2-2-1 > 「ヘボン式 英語方式」、スポーツ選手のユニホームのなまえ表記やパスポートで許容されているなまえの表記では< 2-2-2 > 「ヘボン式 OH方式」、ローマ字入力などでは< 3 > 「かな置き換え方式」、というようになる。特に長音、それも才段長音の表記については複雑な状況にある。

4. ローマ字表記の問題点

このままの趨勢がつづけば、ローマ字表記が「かな置き換え方式」になっていくであろうことは容易に想像できるし、それはカタカナやひらがなの表記へも影響をあたえていくであろう。『ローマ字のつづり方』は、ローマ字で日本語の文章をかくためのものであるのに、いまのわかものたちがローマ字で文章をかいたら、おそらく「かな置き換え方式」になるだろう。それも

「ヘボン式」で「ローマ字長音符号」をつかわない「ヘボン式 英語方式」とないまぜになったかたちで。ただ、キーボード入力主流でなくなれば、状況はかわる。タッチパネルになれば、携帯メールの入力のように指一本でできるし、そうなればローマ字より、かなのほうが主流になって、ローマ字入力は少数派になるかもしれない。このように予測が困難な点があるけれども、ローマ字表記について、今後どのような点の解決が必要であるかをかんがえてみる。

第一に、日本の表記規則は、あまりにもまにあわせのことで、全体として日本語の表記をどうしていくか、という方向がみえない点が問題である。そのため、ローマ字表記が日本語の表記のなかでどのような位置をしめ、どのような役割をするのかもあいまいである。

ひらがなとカタカナとでさえ、一対一で対応していない。ローマ字はまったく別。点字もまったく別。これは、日本語の表記については、文字の種類によって、ちがう団体や人の意見が前面にでること、漢字が最大の焦点であったという事情もからんでいるので、やむをえない面もあった。しかし、文字の種類相互の関係について、真剣にかんがえてこなかったことは反省すべきであろう。漢字についても、『常用漢字表』と『人名漢字表』と『JIS漢字』とが相互の関係をあまりかんがえないまま、別々に議論されてきた経緯があって、それがひとつの問題点になっている（小林 [2011] 参照）。

第二に、日本語のローマ字表記は、だれのためのものなのか、という問題である。日本語話者が日本語を表記するためのものであるならば、いくらか改良するとしても基本的には<1>の「訓令式 長音符号方式」でよいはずである。これまでよりも積極的に学校教育でこれを標準としておしえ、そして、キーボードから「ローマ字長音符号」を入力できるようにすべきである。しかし、現状では「訓令式 長音符号方式」は劣勢であって、今後もひろくつかわれる可能性がすくない。おそらくは、英語母語話者を代表とする、観光でおとずれる外国人のため、とおもう人がおおいからであろう。各種のホームページの英語版のありかたが、まさにこれである。「ヘボン式」はもともと英語話者にとっての便をかんがえてつくられたものである。したがって、英語の文章のなかで「ヘボン式 英語方式」が便利なのは当然である。しかし、ほかの言語ではどうか、という点がかえりみられることはあまりない。フランス語では、中国語（ピンイン表記）では、ロシア語では、とかんがえれば、それぞれの言語に応じたバリエーションがあってもいいはずである。

おわりに

外来語も日本語の一部である。にもかかわらず、その表記に関しては問題がおおい。ふつうはカタカナでかくことになっているが、ゆれがおおきく、つかわれるカタカナつづりには、ひらがなではつかわないものがある。ローマ字でかく、ということになると、たとえば「～センター」

を【s-e-n-t-a-a】とつづるのは異様で、英語の原つづりでかくのがふつうだとおもう人もおおい。外来語は、もともと英語だけとはかぎらないのに、である。外来語をローマ字でかく方法の検討がひとつの課題であろう。

ローマ字表記に関して、もうひとつ重要な検討課題は、長音表記をどうあつかうか、である。日本語では母音の長短が示差的なはたらきをする。「オノ」(小野)と「オーノ」(大野)とは別人である。「ドロ」(泥)と「ドーロ」(道路)とは別の単語である。これらを区別できないのでは、日本語の表記として失格である。現在のところ、実用的には「ローマ字長音符号」をつかうよりも、母音字をかさねるのがよい、とかがえていっている。

今後は、このような点の検討もふくめて、ローマ字表記の方式についてよりよい案をかंगाえていきたい。

【参考文献】

- 石綿敏雄 (いしわた・としお) [1997] 「ローマ字使用の実態——かな・漢字との比較」『国文学 解釈と鑑賞』788 (第62巻1号) 至文堂 pp.14-20
- 出川直樹 (いでかわ・なおき) [1995] 『現代ニホン語探検』小学館 (のち、[1998]『増補版現代ニホン語探検』小学館ライブラリーSL112 小学館)
- 小林龍生 (こばやし・たつお) [2011] 『ユニコード戦記 文字符号の国際標準化バトル』東京電機大学出版局
- 佐渡島紗織 (さどしま・さおり)・小林良子 (こばやし・よしこ)・齋藤眞美 (さいとう・ますみ) [2009] 「地下鉄案内板にみるローマ字表記——東京における1999年の実態」 庄司博史ほか編 [2009] pp.123-144 小学館辞典編集部編 [2007] 『句読点、記号・符号活用辞典。』小学館
- 庄司博史 (しょうじ・ひろし)・P.バックハウス (Backhaus)・F.クルマス (Coulmas) 編著 [2009] 『日本の言語景観』三元社
- 高橋太郎 (たかはし・たろう) [1997] 「駅名のローマ字表記とオ段長音表記の国際化」『国文学 解釈と鑑賞』788 (第62巻1号) 至文堂 pp.195-184
- 玉村文郎 (たまむら・ふみお) [1997] 「日本語の表記法とローマ字文における外来語・外国語の表記」『国文学 解釈と鑑賞』788 (第62巻1号) 至文堂 pp.29-40
- 成田徹男 (なりた・てつお) [1994] 「現代日本語のかなづかいの問題点」『名古屋市立保育短期大学研究紀要 第33号』p.33-48
- 菱山剛秀 (ひしやま・たけひで) [2005] 「地名のローマ字表記」『国土地理院時報』108号 pp.65-75